

第一章 豊前地域の祭りの概要

はじめに

福岡県の東部に位置する豊前市は人口二九〇〇〇人余りの田園都市である。市域は一一・一七kmに及び、全体の約七割を山林が占め、佐井川流域に開析された扇状地は古代より本地域の中心をなしている。その地勢は北を周防灘に面し、南には標高一三〇・八mの犬ヶ岳を中心とした山並みを抱える。東は一級河川である山国川を挟んで中津平野が開け、西は英彦山山系から延びる舌状の山稜により旧築城郡と画されている。

こうした地形上の特徴から、その文化圏は山国川流域を中心に築上郡東部と大分県中津市の旧中津市、旧三光村を含むエリアで集約されると言っても過言ではない。神楽の形態、神社で行われる神幸祭やその祭りに登場する傘鉾や祇園の山車など、共通点は驚くほど多い。ここではこうした祭りについて概観し、その特徴を明らかにする。

一、祭の種類

今回の調査に当たってその対象とする祭については所謂伝統芸能としての祭り、地域で伝承されてきた神事を中心とした祭礼によるものが考えられた。所謂祭りというものを全ての信仰に基づく儀礼行為とした場合、その範囲はもつと広範になると考えられ、さらに、本来、民俗学的な調査として実施する場合はこれら全ての祭りについて悉皆調査を実施すべきである。しかし、今回は時間的な制約からそうした方法を執ることが出来なかつたため、神楽や楽打ちといった伝統芸能、神幸祭など神社に伴う祭礼、さらに豊前市内に残される様々な儀礼の三つに大別して調査を行った。以下、その概要について述べる。

二、民俗芸能

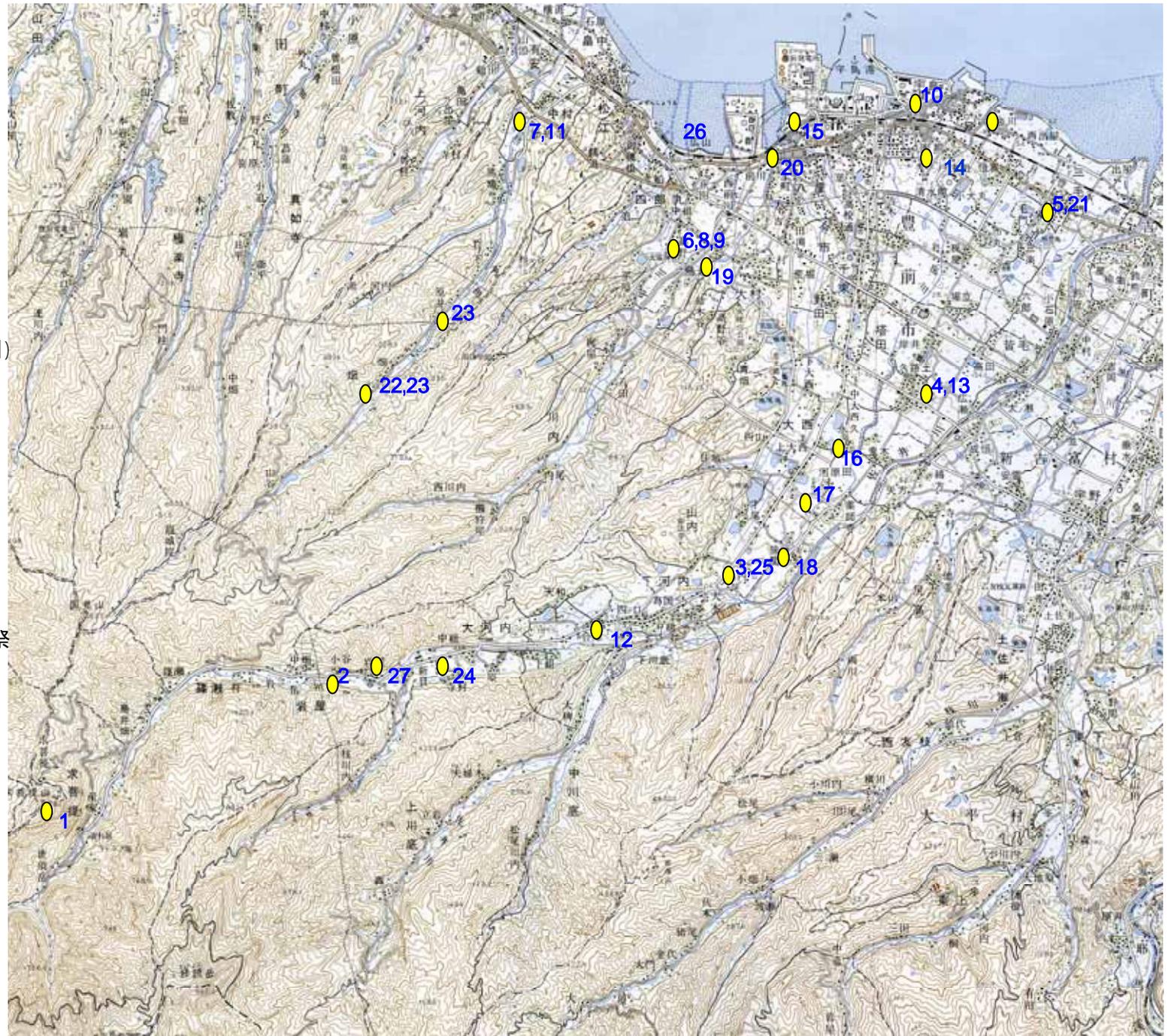
神楽

神楽は一般的に豊前岩戸神楽と称されるもので、かつては八団体（沓川神楽、畑神楽は現在活動をしていない）が確認されているが、現在は六団体によって継承されている。神社の祭礼などで春の奉納も見られるが、基本的には収穫を感謝する秋神楽であり、九月～十二月にかけて市内の五〇箇所前後の神社で奉納される。その起源は明確ではないが、神楽の様子が記録に現われるのは縁起などを除けば近世以降である。もちろんそれ以前から社家によ

り祈祷を中心とした芸態が伝承されていたことは容易に想像ができ、明治三年（一八七〇）に「神職演舞禁止令」が出されたことにより氏子へと伝承された。その特徴は豊前岩戸神楽三十三番と形容されるが、実は三十三番は後に当てはめられた数字と考えられ、当初から三十三番の演目があつたわけではないと考えられる。それを傍証する資料として宝暦二年（一七六二）と推定される「御祈祷御被岩戸神楽次第」（長谷川家文書）には二四番の演目が記され、その内容は現在の演目よりシンプルなものとなっている。一方、「神坂神楽入目録御公儀二書出シ候扣帳」には綱切神楽という三六番神楽のことが記されており、詳しい演目は不明ながら夕方四時から翌朝の八時まで一六時間にも及ぶ神楽が存在したことを示している。また大富神社文書に残される寛政三年（一七九一）の「宝劔治国神楽番組」にはさらに多くの演目が見られ、現在の演目には見られない様々な番組を知ることができる。こうした里神楽成立以前の社家神楽の時代には何らかの理由による番組の改変が幾度となく行なわれたと考えられ、古くからの芸態が不変のものとして伝えられたものではないことが知られる。その理由としては社家を取り巻く社会情勢の変化、例えば中世においては両部神道の隆盛と修験道文化の影響が、また、近世においては寛政五年（一六六五）に出された「諸社禰宜神主等法度」による吉田神道の台頭と、それに伴う神道の密教的要素の排除などが考えられる。

さて、現在の神楽演目は式神楽、奉納神楽に区別されそれぞれの団体で芸態や演目に若干の差異はあるものの、本来同じ流れの中で伝承された芸能と考えられる。それは、前出の近世資料に記される社家の名称からも明らかで、大富神社の清原家、長谷川家、石清水八幡神社の矢幡家、嘯吹八幡神社の初山家、角田八幡神社の矢幡家、高瀬村の高橋家などの社家一七、一九名ほどが合同で神楽の執行を行なっていることから、本地域に伝えられる神楽の芸態は本来同一のものといえる。式神楽は所謂採物神楽である被いを主体としたもので、直面の二人舞や四人舞を中心とし、神招ぎの役割を果たしている。「岩戸」はこの式神楽に含められるが、構成としては奉納神楽終了後に最後の演目として舞われる（三毛門神楽講を除く）。式神楽前半が終了した後には奉納神楽と呼ばれる様々な演目が演じられるが、これは鎮魂の神わざとも言うべきもので、その名の通り氏子からの奉納で演じられる。こうしたシテムは豊前に特有なもので、中世の頃には祈祷としての性格が強かつた神楽の慣わしが形を変えて伝承されているのかもしれない。したがって、地域によっては奉納されない演目もあり、特に湯立神楽は奉納される場所が限られている。

- 1 求菩提山のお田植祭
- 2 岩屋神楽講
- 3 山内神楽講
- 4 黒土神楽講
- 5 三毛門神楽講
- 6 大村神楽講
- 7 中村神楽保存会
- 8 山田の感応楽
- 9 大富神社の神幸祭(八屋祇園)
- 10 宇島祇園
- 11 角田八幡神社春季神幸祭
- 12 清原神事
- 13 石清水八幡神社春季神幸祭
- 14 足切神社春季神幸祭
- 15 沓川神社春季神幸祭
- 16 貴船(永久)神社春季神幸祭
- 17 宗像(薬師寺)神社春季神幸祭
- 18 貴船(狭間)神社春季神幸祭
- 19 須佐(鳥越)神社春季神幸祭
- 20 菅原神社神幸祭
- 21 春日神社春季神幸祭
- 22 水神社春季神幸祭
- 23 畑のどんと焼き
- 24 山人(やまんど)走り
- 25 山人(やまと)走り
- 26 巖島神社百手祭
- 27 花祭り(岩屋)



第 1 図 豊前市内の主な祭りの奉納場所

No	祭の名称	団体名	指定区分	期日	祭具			
					山車	神輿	傘鉾	その他
1	巖島神社百手祭	巖島神社氏子	市指定	3月第1週				
2	求菩提山のお田植祭	お田植祭保存会	県指定	3月29日				
3	清原神事	嘯吹八幡神社		4月第2土日				
4	大富神社の神幸祭(八屋祇園)	大富神社氏子	県指定	4月30日、 5月1日				
5	山田の感応楽	山田感応楽保存会	県指定	4月30日、 5月1日				
6	宇島祇園(宇島神社春季神幸祭)	宇島祇園保存会	市指定	5月3～5日				
7	角田八幡神社春季神幸祭(豊前楽)	角田八幡神社氏子	市指定	5月第3土日				
8	石清水八幡神社春季例大祭	石清水八幡神社氏子		5月3日				
9	足切神社神幸祭	足切神社氏子		4月15日				
10	畑神幸祭(春季例大祭)	水神社氏子		4月23日				
11	沓川祇園(沓川神社春季例大祭)	沓川神社氏子		5月5日				
12	春の神幸祭(三毛門祇園)	春日神社氏子		4月23日				
13	貴船神社春祭	貴船(永久)神社氏子		4月16日				
14	須佐神社八朔の節句祭	須佐(鳥越)神社氏子		9月3日				
15	宗像神社春祭	宗像神社氏子		5月14日				
16	貴船神社の神幸祭	貴船(挟間)神社氏子		5月13日				
17	菅原神社神幸祭	菅原神社氏子		10月25日				
18	豊前市の岩戸神楽	岩屋神楽講	県指定	秋				
		山内神楽講	県指定	秋				
		黒土神楽講	県指定	秋				
		三毛門神楽講	県指定	秋				
		大村神楽講	県指定	秋				
		中村神楽保存会	県指定	秋				
19	山人(やまと)走り	嘯吹八幡神社氏子		11月27日				
20	山人(やまんど)走り	日吉神社氏子						
21	畑のどんど焼き	畑どんど焼き保存会	市指定	2月14日				

現在使われている
以前は使われていた

第1表 豊前市内の主な祭り

期日は平成18年度の実施日です
神楽の奉納は10月～12月上旬が多いよう
です

その演目は別表に示すとおりであるが、豊前市の神楽で特徴的な演目としては「駈仙（御先）神楽」と「湯立神楽」を挙げる事ができる。「駈仙（御先）神楽」は出雲神話の天孫降臨を表したものとわれ、式神楽に含められる「式駈仙神楽」と奉納神楽にある「駈仙神楽」の二種類がある。内容としては特に相違点はないが、奉納神楽のそれは短縮バージョンとも言えるべきもので、神社によっては一晩に一〇回、二〇回と奉納される人気の演目である。さらに奉納神楽には「綱駈仙神楽」「乱駈仙神楽」などの駈仙を冠する演目もあり、中でも「神迎え」は天孫降臨のオールスターキャストとも言えるべき内容である。最近ではこの駈仙神を中世両部神道の教本である「中臣被訓解」に示される第六天魔王と天照大神との説話にその原形を求める説もあり興味深い。いずれも天地開闢を物語るが、駈仙神楽に見る駈仙鬼と幣方が争うようなシーンは天孫降臨の粗筋には無く、一方の「中臣被訓解」には同じような筋書きながら第六天魔王が天照大神に戦いを挑む様子が描かれていて、神楽の演劇化が平安時代末から中世にかけて進められたとすればこうした物語がそのモチーフになった可能性を示唆したものである。

さて、今ひとつの特徴的な演目として「湯立神楽」があるが、一般に湯立神楽は東北の霜月神楽や奥三河の花祭などをその代表的なものとし、煮えたる神聖なる「湯」を浴びることによりその靈験を得ようとするものである。しかし、豊前地域で行なわれる湯立神楽は駈仙神楽による天と地の交合を基本とし、これに陰陽道による五行の輪廻と豊前修験道の最大の祭礼である「松会」の所作が融合した独特の内容をもつ。その芸態は極めて祈祷の色合いが強いもので、高さ一〇m近い斎鉾（ゆぼこ）に駈仙鬼が上る様は松会行事の幣切神事を彷彿とさせ、湯釜に全国から八百万の神を勧請した後に火鎮と称して行われる渡りは山伏の護摩修行そのものである。その成立過程に求菩提の修験者が係ったことは容易に想像が付き、事実、慶長八年（一六〇三）の「神楽大事」と称する文書（長谷川文書）には行光坊なる求菩提山の山伏が社家に秘法伝授したことが記されている。

このように豊前市内に伝えられる神楽の演目を見ると、江戸時代からの伝統的な部分を残しながら、明治以降の里神楽への変遷の中でかなりの改変が見られる。特に一八世紀中ごろでは式神楽と奉納神楽の区別は無いようであり、現在言う奉納神楽の演目が見られるのは一九世紀以降と考えられ、明治以降さらに改変を経て現在に伝えられている。



神迎神楽(黒土)



駈仙神楽(岩屋)



乱駈仙神楽(山内)



綱駈仙神楽(三毛門)

宝曆12(1762)	寛政3(1791)	明治23年	昭和23年	昭和60年(岩屋)	平成6年(山内)	神楽組合番組表
長谷川文書	宝劔治国神楽		築上支部神楽規則	鑑賞のしおり	福岡県の民俗芸能	
	小太刀 長刀 駮仙神楽 待囃 寒水神楽 小太刀 長刀 虫迎神楽 待囃 楽					
御被 大禮 勸請奉幣	御被 奉幣		大被祝詞	奉幣 大神舞	大祝詞	
	御神拝 詔刀 引入柴 初礼音取					
壹番神楽 手総神楽	一番神楽 手総神楽 二人手総神楽 掛手総神楽 伏魔狩神楽 三神神楽 美引神楽 花神楽	一番神楽 餅まき神楽 花神楽 米まき神楽 駮仙(御先)神楽 一人手篋神楽 四手神楽 夜駮仙神楽 姫神楽	一番神楽 花神楽 手房神楽	大麻舞 大潮舞 手草舞 駮仙	一番神楽 花神楽 篋神楽 式御先神楽	壹番神楽 手篋神楽 駮仙
花神楽 三神神楽 駮仙神楽						
地割神楽 宝満神楽 幣征護神楽 弓征護神楽	神前御被 御前神楽 太平楽神楽 神屋神楽 八面神楽 祝詞 地割神楽 神宣 宝満神楽 八乙女神楽 仮殿御被 幣征護神楽 弓征護神楽	地割 弓吾	地割神楽 弓正号神楽	正吾 地割	弓正護神楽 地割神楽 神送り 幣正護神楽	弓正護 地割
		夜中駮仙 二人手篋 乱駮仙 花傘神楽 綱駮仙 劍神楽 三鈴 山田大蛇 三神神楽 夜明駮仙	御先神楽 三神神楽 綱御先神楽 乱御先神楽 四人劍神楽 一人劍神楽 四人姫神楽 蛇退治 神迎 正遷官神楽 三十三番神楽	地堅 地堅駮仙 三神 盆舞 四人劍 劍舞 二人手草 乱駮仙 掛手草 宝満 大蛇退治 本地割 美々久 神迎 五穀成就 五大神 綱駮仙 湯立 鎮火祭	三神神楽 四人劍神楽 二人劍神楽 劍神楽 盆神楽 綱御先神楽 二人手草 乱御先神楽 地堅神楽 本地割神楽 神迎神楽 大蛇退治 柴入神楽 天之安河原の集い	神迎 大蛇退治 綱駮仙 本地割 四人劍 乱駮仙 三神 劍 盆 御先 二人手篋
	早神神楽 大臣神楽 神飼神楽 祝詞 綱征護神楽 詔刀 綱口神楽 綱祭文 綱駮仙神楽 御被 綱切 御被		湯の御先神楽 米舞神楽 本湯立神楽		湯立神髓神楽 湯御先神楽 火鎮神楽	湯立
思兼命 太玉命 素戔雄尊 八重垣神 四方鬼 保古 鈿女命 児屋根命 戸取太力雄命		岩戸前 22～33番 式と奉納の区別は無い	岩戸前 12番	岩戸開き 思兼命 伊斯許理度賣命 布刀玉命 児屋根命 天宇受賣命 手力男命	岩戸開き 思兼命舞 八重垣之命舞 布刀玉命舞 天児屋根之命舞 玉祖之命舞 天之鈿女之命舞 手力男之命舞	岩戸
	於中川 変穢清浄被・悉皆成就被 於神前 一切成就被 神官一同 詔刀 神送 蔵入 注連揚 退下					
神送り 注連揚 蔵入 退下						

第2表 時代ごとの神楽演目の変遷



湯立神楽の斎庭神座の棚(山内)



湯立神楽 一宮記(大村)



湯立神楽 湯釜ヒトガタ(大村)



湯立神楽の斎庭(山内)

楽打ち

楽打ちはかつて市内で盛んに行われていたが、現在は二箇所で伝承されるのみで、その多くは失われてしまった。本来、楽打ちは田楽の一種として始められたもので、太鼓を中心としたものであることから田楽の語源と考える向きもあり、多くは雨乞いを祈願する農耕儀礼であったという。今も伝承されるのは「山田の感応楽」(大富神社)と「豊前楽」(角田八幡神社)で、前者が天地感応楽とも呼ばれ大ぶりの締太鼓を胸前に抱え円陣を組んで勇壮に舞い上げるのに対して、後者はやや小ぶりの締太鼓を用い直線的な陣形で交差しながらリズムカルに舞い上げる特徴をもっている。こうした芸態の違いは結果として本地域に伝承された楽打ちの二つの類型を現していて、それは演じる者とその起源の違いであろうか。「豊前市史」によればこの他に公富楽(赤熊 足切神社)、久路土楽(黒土 石清水八幡神社)、天狗拍子(狭間)、清明楽(篠瀬 貴船神社)などが知られるが、これらの楽打ちはすでに見ることは出来ない。



公富楽



清明楽



天狗拍子

三、祭礼

神幸祭

さて、次に豊前の一般的な祭りである神幸祭（祇園）について見ておきたい。今回調査をした祭礼は一四箇所、その名称は祇園と呼ばれるもの、神幸祭と称するものが混在していた。その理由は判然としないが多くの春季神幸祭と称し四〜五月に執行されるものである。祇園と称されるものは本来疫病封じの夏の都市型祭礼であり、京都の八坂神社の祇園祭に起源をもつとされる。本地域でももともと六月や七月に行なわれていたものが、社会情勢の変化や旧暦から新暦に変わった明治時代以降、春に行なわれるようになったと考えられる。ただ、肝心の祇園社を勧請した地区はほとんど無く、近世以降、「祇園」という言葉だけが一人歩きした感が否めない。その中でも特筆されるのは「大富神社の春季神幸祭」で、その内容は神幸行列と楽打ちである。「山田の感応楽」（隔年奉納）、そして八屋祇園を含むという本地域の祭礼と民俗芸能を全て含むような複合的な内容となっている。こうした構成は「角田八幡神社の春季神幸祭」にも見られ、神幸行列に「豊前楽」（隔年奉納）、そしてかつては「松江祇園」が組み合わされていた。また、楽打ちは無いものの宇島祇園のそれも「宇島神社の春季神幸祭」に含まれ、本地域特有の複合的な都市型祭礼となっている。こうしたあり方はその祭礼を支える氏子の負担軽減と、祭礼の合理化の結果とも考えられる。



大富神社神幸祭（昭和40年代）



宇島祇園（昭和30年代）



清原神事



石清水八幡神社神幸祭

一方、「清原神事」（山内 嘯吹八幡神社）、「石清水八幡神社神幸祭」（黒土）、「足切神社春季神幸祭」（赤熊）、「沓川祇園」（沓川神社）、「春日神社春季神幸祭」（三毛門祇園）（三毛門）、「畑神幸祭」（水神社）のように御神輿と傘鉾という組み合わせで、本来の神幸祭という祭礼の原形を今に伝える祭もある（但し、畑ではかつて祇園車が存在し、今でも地元では「畑祇園」と称する）。神幸行列は神社成立以前に祭神が来臨した場所、すなわち御旅所へ巡行しそれを神社に迎える祭儀がその原形とも言われるが、本地域の例としては全てがこうした形態ではない。しかし、祭神を神輿に遷し氏子域を巡行することで祭礼としての神幸祭は地域の信仰を維持してきたと考えられる。ところで、本地域の神幸行列に特徴的な傘鉾は実は極めて限られた地域に存在する祭礼の道具といえる。その分布は管見する限りでは現在の豊前・築上を北限に南は大分県の宇佐市長洲辺りまでで、旧豊前国南部の周防灘沿岸に限られる。その構造は丁度太鼓が収まる程の立方体の枠を持つ本体に野点に用いる大ぶりの和傘を立てたもので、和傘の廻りは刺繍などを施した幕を下げる。かつてはこの刺繍でその豪華さを競ったと考えられ、古いものは江戸時代の作と伝えられる。そして本体には彫刻などを施し、担ぎ棒を差し込んで行列に付き添い御囃子を担当するが、現在はそのほとんどが台車にのせられて担ぐことはない。その原形は明らかに京都祇園に見る傘鉾であ

るが、こうした構造は他に例を見ない。ついでに言えば、神幸行列のメインである神輿も今では専用の台車に載せられることが多く、氏子がこれを引くようになっていく。その台車も周辺地域にはあまり見られない形式で、自動車のシャーシをベースにタイヤをつけ、周囲を彫刻付の枠で偽装しており、ある意味現代的な祭礼の改変とも言える。



沓川祇園（御神輿）



三毛門祇園（傘鉾）

さて、こうした神輿に傘鉾を組み合わせた神幸行列が一般的な組み合わせであるのに対して、神輿を中心とした祭礼も散見される。そうした地域では傘鉾は存在せず、お囃子はもともと太鼓を担いで横笛、鉦は歩いて行列に付き添っていたと考えられるが、現在では屋台のような工夫をしたりしてやはり作業の軽減を図っている。この他にも儀礼としての神幸はそれぞれの神社に存在したと考えられるが、今回は調査の時間的な制約から神輿など出し物があるものに限定した。

祇園

ここで祇園について若干その内容に触れておきたい。現在豊前に残される祇園の形式は所謂八屋祇園と宇島祇園である。前述のようにかつては松江にも祇園があり、さらには合河でも一時祇園車が出たことがあった。合河の須佐神社は近世に今井祇園で有名な須佐神社（行橋市）から祇園社を勧請し六

月に祇園祭をしていたとしていたと伝えられ、最後に祇園車が出たのが昭和三〇年と言う。松江では昭和四九年頃まで祇園車が出ており車輪の老朽化で運行できなくなつたものの、今でも御旅所である島中の七社神社では組み立てが行なわれている。やはり、仕掛けの大きな祭礼はそれを支える氏子組織と資金力が必要で、祭礼の伝承を行なう上で大きな要素といえる。

さて、八屋祇園がどのような経緯で成立したかその詳細は不明であるが、少なくともその祖形となつたのは中津祇園であることは間違いない。一方、宇島祇園はその成立が明らかであるが、ここでも中津祇園がその発展に大きな影響を与えている。その中津祇園の起源は古く、間無浜神社の前身である「豊日別宮（とよひわけぐう）」の祭礼に始まるといわれ、弘安六年（一二八三）にはすでにその祖形が見られるとも言われる。その後天和三年（一六八三）には藩主小笠原長胤が京都から祇園車を取り寄せ、さらに宝永三年（一七〇六）には山車が登場して下祇園が成立し、遅れて宝暦二年（一七六二）には上祇園も整い中津祇園の現在の祭礼形式が完成したと言われる。この間享保年間（一七二〇頃）には「祇園車」と言つ言葉も記録に見え始め、中津祇園が豊前地域の代表的な祭りとして成立した時期と考えられる。そのエネルギーとなつたのは時の藩主の強い庇護と中津商人の財力で、都市型祭礼成立の一つの条件と言える。さて、中津型祇園車最大の特徴は「折屋根式」と言われる跳ね上げ式の屋根で、城下町の狭い路地を巡行するために考案された知恵と言われ、他にあまり例を見ない構造である。その分布は旧上毛、下毛郡の周防灘沿岸地域に見られ、明治から昭和にかけては祇園車の新造にともない遠く筑豊や大分県玖珠地方にも売却され、現在も使用されているものもある。八屋祇園や宇島祇園にも中津から古い祇園車を購入した記録があり、前川、八屋、魚町などで使用されたという。中には逆に宇島の車が中津の新浦（龍王町）に売却された例もあり、中津祇園と八屋、宇島祇園の深い関係が知られる。こうした歴史的な経緯を見ると、八屋地区で大富神社の春季神幸祭に際し祇園車が出るようになったのは少なくとも一八世紀以降と考えられるが、詳細については今後の調査に負うところが大きい。ただ、祇園祭の発生が八屋、宇島の町の発展と商人の財力の裏付けなしに成し得なかつたことは事実で、そうした意味では近世の商人の活躍がその鍵を握るのかも知れない。そこで注目されるのは宇島の「萬屋」で、天保二年（一八三一）の記録によれば小倉藩の財政困窮に際し京都郡行幸村（現 行橋市）の「飴屋」とともに吉万両もの金子を藩のために用立てたことが知られ、有数の御用商人としての地位を築いていたことが分かる。宇島祇園の最盛期には一二台の山車があつたと言われるのも、こうした「萬屋」の財力をその背景に考え

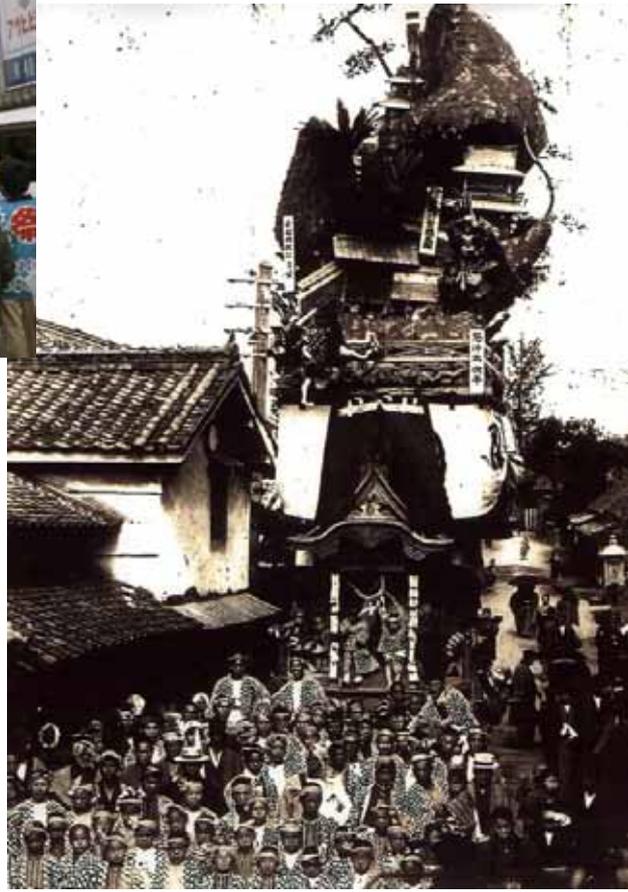
るべきであろう。いずれにせよ、こうした在郷町の発展とともに祇園は成立し現在に受け継がれたものであり、都市型祭礼の典型として街に活力を与えている。



松江祇園車（昭和49年頃）



合河祇園車（昭和30年頃）



山鉾（八屋；明治38年）



お田植祭り



どんど焼き

四、様々な祭り

一方、地域では独自に継承された祭も存在する。修験の山として有名な求菩提山には山伏により伝承されてきた豊前修験道最大の祭礼である「松会」行事のつち、田行事として「お田植祭」が時代の流れに翻弄されながらも今も伝承されている。言うまでもなく「松会」はその年の五穀豊穡を予め祝う予祝行事で、現在松尾山、松原山、等覚寺などに伝承されている。その内容を知ることのできる資料としては英彦山神社に伝えられる「松会絵巻」が知られ、それによれば「神幸祭」「田行事」「幣切行事」の三つで構成される。このつち、求菩提山では幣切り神事は完全に欠落しているものの、田行事についてはほとんどが伝承されている。お田植祭は一般に「田楽」と呼ばれる伝統芸能で、日本では神楽と並び古くから各地に伝えられる芸能である。それは弥生時代以来の日本の農耕社会を象徴するもので、日本人の神に対する祈りの表れでもある。こうした農耕儀礼にまつわるものは他にも見ることができ、山内の嘯吹八幡神社と大河内の日吉神社に伝わる「山人走り」神事は、春に農耕神として里を守った神が秋に山へと帰るといふ信仰によるもので、今ではあまり見ることの出来ない貴重な儀礼である。ただ、併せて嘯吹八幡神社の成立に関わる遷宮の影響を多分に受けている面も見逃せない。また、正月の火の儀礼として各地で行なわれる「どん



山人走り



百手祭り

を見極めるかだと思う。そう考えた時、現代社会のもつ課題、すなわち地域のコミュニケーションや人々が助け合いながら暮らす社会の構築といった問題の解決に、祭りが果たす可能性を見ることが出来る。地域が大切に守り伝承してきた祭りは地域の財産であり、それをいかにこれからの街づくりを生かしてゆくか。そしてそのためにはただの「騒ぎ」ではなく、一人ひとりがその「祭り」の意味を考え、「祈りの文化」として祭りを理解し、大切に受け継いでゆかなければならない。合理化、格差社会、成果主義。息が詰まりそうな現代社会であるからこそ、ゆっくり、心豊かに、笑顔溢れる生活を取り戻したいと思う。日常の喧騒を忘れた特別な空間。それが祭りの持つ魅力なのかもしれない。



ど焼き」は一般的に知られるが、畑、馬場の地域で行なわれる「どんど焼」は他にあまり例を見ないもので興味深い。すなわち、通常見るようなタワー状のものではなく、どんど小屋と呼ばれる藁小屋に古い注連縄やお札を下げたそのまま燃やすという珍しい形式で、その謂れは不明である。さらに悪霊祓の神事である「百手祭」は広く西日本で見られるものであるが、本地域では求菩提山の鬼伝説にまつわる神事として受け継がれている。こうした祭の多くは神道に纏わるものであるが、そうした中、豊前市内で比較的多くの場所で行なわれている仏教関係の行事が釈迦の誕生を祝う「花祭り」である。今は五月八日に行なわれており、地域の行事として伝承されている。

おわりに

以上、豊前市内に伝承される民俗芸能、祭礼などについてその概要を述べた。調査としては十分ではなく、拙速なイメージは拭えないがその特徴の一端は明らかにしたと考える。

祭りは地域が紡ぐ歴史なのかもしれない。そして、それを支えるのはそこに住む人々でありまた、それを懐かしく思う人々でもあると思う。時代の流れとともに社会は変化し街は変貌を遂げるが、それは良くも悪くも受け入れなければならない宿命である。大切なことはそれをどう咀嚼し正しい方向性

【参考文献】

- 一九八四 小学館 『演者と観客、生活の中の遊び』、日本民俗文化大系七
- 一九八五 小学館 『都市と田舎、マチの生活文化』、日本民俗文化大系一一
- 一九九三 苅田町教育委員会 『等覚寺の松会』
- 一九九六 有馬徳行 「旧上毛郡の神楽 第一節 概観」
『豊前岩戸神楽』、神楽の里づくり構想推進協議会
- 二〇〇五 石塚尊俊 『里神楽の成立に関する研究』、岩田書院
- 二〇〇五 橋本幸作 『豊前国神楽考』、海鳥社
- 二〇〇五 白川琢磨 「△落差△を解く△豊前神楽を例として△」
『自社会研究としての人類学の確立に向けた基礎的研究』、福岡大学人文学部
- 二〇〇六 川本英紀 「村のなかの神社、神事のなかの神楽、近世豊前の神社・神楽」
『京築地区神楽関係史料調査』、福岡県立図書館